大和物語

檜垣の御

筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いとらうありをかしくて、世を經けるものになんありける、年月かくてありわたりけるを、純友がさわぎにあひて、家も燒け滅び、物の具も皆とられはて、いとといみじうなりにけり、

○檜垣の御　後撰集雜上に、筑紫の白川といふ處にすみ侍りけるに大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに水たへんとて立寄りてこひ侍りければ水をもて出でゝよみ侍りける、ひがきの嫗「年ふれば我黑髪も白川のみづはぐむまで老にけるかな」袋草子に、肥後の國の遊君檜垣、謠曲に、昔筑前の太宰府に花に檜垣しつらひてすみし白拍子、後にはおとろへて此白川のほとりに住みしなり、など見ゆ、又檜垣嫗家集一卷あり、文章多き集にて、其中の文を扶桑拾葉集にも載せたり、檜垣の御の御は女の尊稱なり、○らうあり　物になれたるをい

205354-000-7

41-93

大和物語

[出版事項不明]

EDV-0565

ふ、○をかしくて　風流なるをいふ、○年月かくて　年ごろかく風流に暮しけるなり、○純友　日本紀略に承平二年十二月十九日乙卯諸卿於陣頭定申藤原純友亂惡事云々扶桑畧紀にも見ゆ、伊豫守從五位下藤原純友、朱雀院の御宇に叛逆を企でゝ、天慶四年に滅びぬ、○物の具　調度なり、○いといみじう　甚衰へたるをいふ、

かゝりとも知らで、野大貳うての使にくだり給ひて、それが家のありしわたりを尋ねて、檜垣の御といひけん人に、いかであはん、いづくにかすむらんと、のたまへば、このわたりになんすみ侍りしなど、供なる人もいひけり、あはれかゝるさわぎに、いかになりにけん、尋ねてしがなと、のたまひけるほどに、頭白き嫗の水汲めるなん、前よりあやしきやうなる家に入りける、

○かゝりとも知らで　かく衰へたりとも知らでなり、○野大貳　公卿補任に小野好古元慶八年甲辰生云々太宰大貳從四位上葛絃一男云々天慶三年正月兼追捕凶賊使云云と見ゆ、野大貳とは小野の野と太宰大貳の大貳をいへるにて、參議小野篁を野相公といふ類なり、○うての使　追討使なり、うてはうちての略にて、「て」は人の意なるべし、○くだり給ひて　筑紫にくだり給ひて也、○それが家　檜垣の御が家なり、○嫗　和名抄に說文云、嫗、和名於無名、老女之稱也とあり、○前より　野大貳の前よりあやしき家に入りたるなり、○あやしきやうなる家　見苦しき家なり、

ある人ありて、これなん檜垣の御といひける、あはれがり給うてよばすれど、耻ぢて來で、かくなんいへりける、

うばたまの我黑髮は白川のみづはぐむまでなりにけるかな

とよみたりければ、あはれがりて、着たりけるあこめ一あさねぬぎてなんやりける、

○うばたまの　黑の枕詞、○白川　筑後風土記に肥後國閼宗縣坤二十余里有一禿山頂有靈沼云云時々水滿從南溢流入白川云々、名所今歌集に肥後飽田郡檜垣の嫗がみづから作れるかたとて、近きころ肥後國なる岩戸山といふ處より堀出でたるをうつしかけるかたとて人の見せて歌こひけるにまことといつ

はりは知らねど、宣長「ながれての世にしのべとや白川のみづからかゝる影はうつせじ」など見ゆ、さて我黒髪も白くあれる意にいひかけたり、○みづはぐむ「みづはさす」ともいふ、源氏夕顔の巻に、みづはぐみてすみ侍るなり云々、舊本今昔物語第十二に、美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美云々、稚齒萠にて、老人の齒ぬけて又ちひさき齒の生ずるをいふ、爾雅に齯、老人齒落而更生者也とあり、さてこゝは水汲むまでに衰へたる意にいひかけたり、○わこめ　和名抄に祖、安古女岐沼、女人近身衣也とあり、女の下に着る衣なり、

又おなじ人、大貳のたちにて、秋の紅葉をよませければ、

鹿のねはいくらばかりの紅ぞふりいづるからに山のそむらん

○おなじ人　檜垣の御なり、○大貳のたち　野大貳の旅館なり、○鹿のねは云々　此歌家集に載せたり、鹿の鳴くころ紅葉するものなれば、かくよめり、躑躅をはとゝぎすの涙に染むといふ類なり、古今集夏「おもひ出づるときはの山のほとゝぎすからくれなゐのふり出でてぞ鳴く」

此檜垣の御、歌なんよむといひて、すきものどもあつまりて、よみがたかるべき末をつけさせんとて、おくいひけり、

わたつみの中にぞたてるさをしかは
とて、末をつけさするに、
秋の山べや底に見ゆらん
とぞつけたりける、

○すきもの　好事者なり、○わたつみ　海なり、○さをしか　鹿のことなり、海の中にたてる鹿といふ難句を出せりとなり、○秋の山べや云々　海の中に鹿のたてるは、秋の山の影が水の底にうつりて見ゆるならんとなり、

處女塚

むかし津の國にすむ女ありけり、それをよばふ男二人なんありける、一人は其國にすむ男、氏は莵原になんありける、今一人は和泉の國の人になんありける、氏は血沼となんいひける、

此段は萬葉集卷九に過菟屋處女墓時作歌、また見菟原處女墓歌、又卷十九に追加處女墓歌などあるをもとゝして、竹取物語の文体にならひて作れり、○よば

ふ　戀慕ふ意なり、○菟原　和名抄に攝津國菟原宇波良とあり、○血沼　古事記上に五瀨命云々到血沼海洗其御手之血故謂血沼海也と見ゆ、もと河内國泉郡なりしかど、靈龜二年和泉日根兩郡を割きて和泉國とせられしかば、今は和泉といへり、

うくて其男ども、年齢顔かたち人のほど、たぐおなじばありなんありける、こゝろざしのまさらんにこそは、あはめとおもふに、こゝろざしのほど、たぐおなじやうなり、くるればもろともに來あひぬ、物おこすれば、たぐおなじやうにおこす、いづれまされりといふべくもあらず、女おもひわづらひぬ、此人のこゝろざしのおろそかならば、いづれにもあふまじけれど、これもあれも月日を經て家のあるじたちて、よろづにこゝろざしを見えければ、しわびぬ、これよりもかれよりも、おなじやうにおこする物ども、とりも入れねど、いろ〳〵にもちてたてり、

○おなじばかり　同じ程なり、○あはめ　嫁せんといふ意、○くるれば　日が暮るればなり、○もろともに來あひぬ　菟原と血沼と共に來たるとなり、○物おこすれば　我に物を贈れば、二人とも同じやうに贈るとなり、○いづれまされり　二人のうち、いづれがまされりともいひ難しとなり、○おもひわづらひぬ　いづれに嫁せんかとおもひ煩ふなり、○おろかならば　「おろか」に粗略の意と愚鈍の意と兩意あり、こゝは粗略の意にて「おろそか」といふに同じ、此兩人の志がおろそかならば、いづれにも嫁せじと思へどとなり、○よろづにこゝろざしを　さま〴〵と志を見せければといふ意、竹取物語に、こゝろざしを見えありくとあるに同じ、○しわびぬ　思ひ煩ふなり、

親ありて、かく見ぐるしく年月を經て、人のなげきをいたづらにおふもいとほし、ひとり〳〵にあひなば、今一人がおもひは絶えなんといふに、女こゝにもされもふに、人のこゝろざしのおなじやうなるになん、おもひわづらひぬる、

○見ぐるしく　つらき意なり、○人のなげきを云々　詞花集雜上に和泉式部「あしかれとおもいぬ山の峰にだにおふなるものを人のなげきは」おふは負持

つ意なり、○いとほし　氣の毒といふ意、○ひとり〳〵にあひなば　一人に嫁しなばといふ意、竹取物語におもひさだめてひとり〳〵にあひ給へや云々、○こゝにもさおもふに　我もさやうに思ふにといふ意なり、

さらばいかゞすべきといふに、そのあみ生田川のつらに、ひらばりをうちてゐにけり、あゝれはそのよばひ人どもを、呼にやりて親のいふやう、誰も御こゝろざしのおなじやうなれば、このをさなきものなん、おもひわづらひにて侍る、今日いかにまれ、此事をさだめてん、あるは、遠き處よりいまする人あり、あるはこゝながら、そのいたつきかぎりなし、これもかれも、いとほしきわざなりといふ時に、いとかしてくよろこびあへり、

○ろのかみ　チヤウド其時といふ意、次にも「そのかみいづれといふべくもあらぬに」といへり、○生田川　摂津八部郡なり、千載集戀二に「こひわびぬちぬのまずらをならなくに生田の川に身をやなげまし」名所今歌集に契沖「をし鳥の妻をあらろふつるき羽に昔をかくる生田川浪」などよめり、○つらに　水面になり、○ひらばり　たひらに張りたる日おほひの幕なり、和名抄に平帳、日宮、和名比良波利とあり、○よばひ人　戀慕ふ二人の男なり、○をさなきもの　女をいふ、○わづらひにて　には過去テニハのになり、下にも「わびにて侍り」といへり、○遠き處より　和泉より來るをいふ、○いまする　「來る」の敬語なり、○こゝながら、此國ながらなり、○いたつき　勞苦の意なり、○いとかしこく云々

二人の男甚喜べりとなり、

申さんと思う給ふるやうは、此川にうきて侍る水鳥を射給へ、それを射あてたまへらん人に、たてまつらんといふ時に、いとよき事なりといひて、射るほどに、一人は頭のかたを射つ、今一人は尾のかたを射つ、ろのあみいづれといふべくもあらぬに、女おもひわづらひて、

すみわびぬ我身なげてん津の國の生田の川は名のみなりけり

とよみて此ひらばりは川にのぞみてしたりければ、つぶりとおち入りぬ、

○申さんと云々　我等が申さんと思ひ侍る事はといふ意にて「給ふる」は「侍る」に同じ、○此川にうきて　此生田川に浮居るなり、○たてまつらん　女を奉らん也、○そのかみ　其時といふ意、前にいへり、○すみわびぬ　此世に住わびぬにて「わびぬ」は俗にいやになれりといふにわたる、○なげてん　生田川に我身を投げんといふ意、○名のみなりけり　生くといふ生田川の名は名のみにて其實なく、我身は死ぬる事よとなり、○川にのぞみて　前に川のつらにといへるに同じ、○したりければ　設けたればといふ意にて、ひらばりの處より、たゞちに落入りたるさまなり、○つぶりと　水の中へ落入る形容詞なり、ザンブト入るなどいふ類なり、

親あわてさわぎのゝしるほどに、このよばふ男二人、やがておなじ處におち入りぬ、一人は足をとらへ、今一人は手をとらへて死にけり、そのうみ親いみじくさわぎて、とりあげて泣のゝしりて、はふりす、男どもの親も來にけり、此女の塚のかたはらに、又塚どもつくりて堀り埋む時に、津の國の親いふやう、おなじ國の男をこそ、おなじ處にはせめ、こと國の人の、いかでか此國の土をばおかすべきといひて、さまたぐる時に、和泉のかたの親、和泉の國の土を舟にはこびて、こゝに持て來てなん、つひにうづみてける、されば女の墓をば中にて、左右になん男の塚ども、今もあなる、

○のゝしるほどに、いひ騒ぐほどになり、○一人は足を云々　女の足をとらへ女の手をとらへたるなり、○そのかみ親　其時女の親なり、○はふりす　葬するなり、○おなじ國の男をこそ　女と同國の男をこそ同じ處には埋むべけれとなり、○おかす　爲すべからざるを爲す意、犯冒などの字をかく、○和泉の國の土云々　攝津の國の土を犯さじとて、おのが國の土を運び持て來て埋めたりとなり「うづむ」は四段にも下二段にもはたらく、故にうづみてといへり、○女の墓を中にて云々　萬葉集に「をとめ塚中につくりおき男塚になたかあたにつくりおけり」とあり、○あなる　「あるなる」の略、

がゝる事どもの、昔ありけるを、繪に皆かきて、故后の宮に、人のたてまつりければ、これがうへを、皆人々、此人にかゝりてよみける、

伊勢の御息所、男の心にて、

影とのみ水の下にてあひ見れど魂なき骸(から)にかひなかりけり

○故后の宮　宇多天皇の女御、七條の宮、溫子を申す、藤原基經の女なり、○皆人々云々　故后の宮に仕へける女房たち、此塚の人々にかはりて歌をよめりとなり、○伊勢の御息所　伊勢守藤原繼蔭の女にて、仁和のころ七條の后に仕へしに、父の官名によりて伊勢とよべり、後に宇多天皇に寵せられて御子桂の宮行明親王を生み奉つりしかば、伊勢の御息所とも伊勢の御ともいへり、古今集後撰集などの作者なり、○男の心にて　二人の男の心にてなり、○かげとのみ

影は影を隱すなどいふ影にて、形とのみといふ意、次の歌にも「影をならべつ」とよめり、○たまなきから　女の形とのみ水の下にてあひ見れども、魂なき骸は、何の詮もなしとなり、

女になり給うて、女一の宮、

限なく深くしづめるわがたまはうきたる人に見えんものかは

○女一の宮　宇多天皇の御女、御母藤原溫子なり、○限なく云々　此歌は伊勢の歌に答へ給へるさまなり、○うきたる　浮薄なる意、

又宮

いづこにか魂を求めんわたつみのこゝあしてともおもほえなくに

○此歌は臨功道士、太眞が魂魄を求めて蓬萊にいたりし故事に寄せてよみ給へり、

兵衛の命婦

つゐのまもろともにとぞ契りけるあふとゝ人に見えぬものから

○兵衛の命婦　藤原兼茂の女、古今集の作者なり、○つかのま　「つか」は一ッカミの意にて「十握(ツカ)の劍」「八束(ツカ)髭」などの「つか」に同じ、僅の間といふ意なり、萬葉集四「夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも妹が心を忘れておもへや」さてこゝは「つか」に塚を添へて塚を並べて諸共に契りけりといへり、○あふとは云々　かく塚を並べて契れども、別々にて一つ塚にあらざれば、あふとは人に見えずとあり「あふ」は婚するをいふ、

いと所の別當

勝負もなくてやゝてん君によりおもひくゝぶの山へてゆとも

○いと所の別當　典侍治子朝臣、古今集の作者なり、三代實錄十七に、貞觀十二年二月十九日辛丑、參議從三位春澄朝臣善繩薨云々長女治子、爲正四位下典侍、拾芥抄に糸所在采女町北、また縫殿之別所也、寛平遺誡に治子朝臣自昔知糸所之事、一生の間猶令兼知之、○勝負も云々　二人の男の心くらべを、くらぶ山に寄せて、かたみに劣らぬこゝろざしのほどをよめり、くらぶ山は山城なり、

生たりしをりの女になりて

あふ事のかたみにうゝるなよ竹の立わづらふときくぞ悲しき

○かたみ　「かたま」の轉にて籠の類なり、さてあふ事の難き意を添へたり、○立わづらふ　籠などの中に植ゑたる竹は根ざしかぬれば、たちわづらふとつゞけたり、

又人

身をなげてあはんと人に契らねどうき身は水に影をなゝべつ

○又人　又人は前に又宮といへる類にて、人ゝ治子朝臣の意にや、「又人男になりて」とあるべきなり、○人に契らねど　女に契らねどなり、○うき身　女を戀慕ひて物憂き身といふ意、○影をなゝべつ　影は形または身といふ意、前の歌にも見えたり、

又今一人の男になりて

おなじ江にすむはうれしき中なれどなど我とのみ契らざりけむ

歌の意いとあきらかなり、

かへし女

うかりけるわがみなそこを大方はかさる契のなかゝましかば

○かへし女　「女になりてかへし」とあるべきあり、○うかりける云々　おなじ江にすむはうれしきとのたまへども、我はいとつらかりける我身といふを水底にいひかけたり、○かゝる契の云々　かゝる契のなかりせば、たのしからむをとなり、

又一人の男になりて

我とのみ契らずながらおなじ江にすむはうれしき汀とぞ思ふ

○みぎは　身を汀にいひかけたり、さて此歌まで治子朝臣の歌なるべし、

さて此男ハ、呉竹のよふかきをきりて、かぎりて、狩衣、袴、烏帽子、帯などを入れて、弓、やなぐひ、太刀などを入れてぞ、うづみたりける、今一人は、おろかなる親にやありけむ、さもせずぞありける、かの塚の名をば、處女塚とぞいひける、

○さて　詞を改め、前に立かへりていふ接續詞○此男　女のかたはらに埋めたる男なり、○よふかき　「よ」は竹葦などの節と節との間をいふ、和名抄に、兩節間、俗云與、後拾遺集戀二に「今日よりはとく呉竹のふしごとによゝ長かれとおもはゆるかな」○かぎりて　區別しての意にや、冠注に竹の長きをもて塚のめぐりに垣をせしなり、とあれど、かくては下の詞にかなはぬやうあり、竹をきりてかぎりて狩衣袴などを入れたるよしなり、○やなぐひ　矢を入るゝ具なり、伊勢物語に「男弓やなぐひを負ひて戸口に居り」とあり、

ある旅人、此塚のもとに、やどりたりけるに、人のいさかひする音のしければ、あやしとおもひて見せけれど、さる事もなし、といひければ、あやしとおもふ〳〵眠りたるに、血にまみれたる男前に來て、ひざまづきて、われかたきに責めぐられて、わびにて侍り、御はかし給へ、ねたきものゝ報し侍らんといふに、おそろしと思へど、貸してけり、

○いさかひする音　戰ふ音なり、○見せけれど　人して見せけれどなり、○血にまみれ　血に汚れたるなり「まみれ」は俗にマブレと云、さて此男は弓太刀などを入れて埋めざる男なり、○かたき　今一人の男を云、○わびにて　困りて

と云意「に」は過去のテニハなる事前にいへり、○御はかし　「はかし」は「はく」の敬語より出でたるにて、佩き給ふ刀の意なり、景行紀に御刀、此云彌波迦志とあり、

さめて夢にやあらんとおもへど、太刀は、まことにとらせて、やりてけり、どばうり聞けば、いみじうさきのでと、いさかふなり、

○とばかり　「しばらく」といふ意、○さきのでと　前の如くなり、

しばしありて、はじめの男來て、いみじうよろこびて、御とくに年をろねたきものゝうち殺して侍り、今よりは長き御をもりとな

り侍るべきとて、此事のはじめより語る、

○はじめの男來て　其下に「太刀をかへして」といふをそへて聞くべし、○御とくに　俗に御かげにてといふに當る、榮花物語浦々の別の巻に「佛の御とくにたひらかにおはしますにこそ」といへり「とく」は德の字音なるべし、

いとむくつけしとおもへど、めづらしき事なれば、とひ聞くほどに、夜もあけにければ、人もなし、あしたに見れば、塚のもとに血などなん流れたりける、太刀にも血つきてなんありける、いとうとましくおぼゆる事なれど、人のいひけるまゝなり、

○むくつけし　俗に氣味ワロシといふに同じ、源氏花の宴の巻に「ふと袖をとらへ給ふ女おろろしとおもへるけしきにて、あなむくつけ、こはたそと、のたまへば」と見ゆ、

猿澤の池

昔ならのみかどにつかうまつる采女ありけり、顏かたちいみじうきよらにて、人々よばひ、殿上人なども、よばひけれど、あかざりけり、そのあいぬ心いみじき、みかどを、かぎりなくめでたきものになん、思うたてまつりける、

此段は萬葉集卷十六に或曰昔有三男同娉一女也云々遂乃彷徨池上沈沒水底於時其壯士等不勝哀頽之至各陳所心作歌三首とあるをもとゝして作れり、あるゝ采女が、かしづくもみかどを慕ひ奉りて、つひに及ばぬ戀の淵瀬に身を沈むといふ、いとめづらしき物語なり、○ならのみかど　大和の奈良に都したまひし帝といふにて、さだかにいはぬよしあり、○采女　いにしへ宮中にて御膳の事などにあづかる官女、

みかど、めしてけり、さてのち又もめさゞりければ、かぎりなく心うしとおもひけり、夜晝心にかゝりて、おぼえ給ひつゝ、こひしくわびしくおぼえ給ひけり、みかどゝ、めしつゝ、事ともおぼさず、さすがに常にゝ見えたてまつる、なほ世に經まじきてゝちしければ、夜みそかに出でて、猿澤の池に身をなげてけり、

○めしてけり　或夜采女をめさせ給ひしなり、○おぼえ給ひつゝ　冠注に、此

次にも、おぼえ給ひけりとある二つの給といふ字は必ず創るべし、またく誤なりといへり、げにこゝは采女がうへなれば、さる事と聞ゆ、たゞし源氏物語には侍るといふ意に用ひたれど、そは「給へ」「給ふる」と下二段のはたらきなり、○事ともおぼさず　心にもとめ給はずとなり、○さすがに　身のはぢにふさはしき所爲をいふに用ふる副詞、○常には云々　帝はさすがにいやしき采女などに心を寄せ給はず、常の御体に見え給ふとなり、○猿澤の池　大和添上郡にあり、

あくなげつとも、みあぐは、えしろしめさぐりけるを、事のついでありて、人の奏しければ、きこしめしてけり、いといたうあはれがり給うて、池のほとりに大行幸し給うて、人々に歌よませ給ふ、柿本の人丸

わぎもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞあはしき

此歌拾遺集哀傷に、猿澤の池に采女の身あげたるを見て人麿とあり、「わぎもこ」は我妹子の略、采女をいふ、「ねくたれ髪」は寢みだれたる髪なり、一首の意あきらけし、

とよめる時に、みかど

猿澤の池もつらしなわぎもこが玉藻あぐあば水ぞひなまし

とよみ給うけり、さて此池に墓せさせ給うてなん、歸らせおはしましけるとなん、

○猿澤の池も云々　猿澤の池もつらき心かな、采女が身を投ぐと知らば、水を涸して死なぬやうにすべきを、しかせざるは、つらき心ありとなり、いとたくみなる歌どやいふべき、「玉藻かづく」は水中に入る意なり、「なまし」は當然なすべかりし意、○此池に　此池のほとりになり、

姨捨山

信濃の國さらしなといふ處に男すみけり、わかき時に親は死にければ、をばなん親の如くに、わかくよりあひそひてあるに、此妻の心いと心うき事多くて、このしうとめのおいかゞまり居たるを常に憎みつゝ、男にもこのをばのみ心のさがなく、あしき事をいひきかせければ、昔の如くにもあらず、おろかなる事多く、この

をばのためになりゆきけり、

此段は古今集雜上に、題しらずよみ人知らず「我心なぐさめかねつさらしあや姨捨山にてる月を見て」とよめる歌をもとゝして作れり、謠曲にも姨捨といふあり、○をば　伯母をも叔母をもいふ、○此妻　此男の妻、をばのよめおり、○いと心うき　心よからぬ者にて、いとつらき意、○しうとめ　姑と書く、男のをばをいふ、○おいかゞまり　老いて腰のかゞまりたるなり、○さがなく　よからぬ意、○おろかなる事　疎略なる事なり、

このをば、いといたう老いて、ふたへにて居たり、これをなほ、このよめ所せがりて、今まで死なぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつゝ、もていまして深き山にすてたうびよとのみせめければ、せめられわびて、さしてんとおもひなり、月のいとあかき夜、おうなともいざ給へ、寺にたふとき業すなる、見せ奉らんといひければ、うぎりなくよろこびて、負いれにけり、

○ふたへにて　腰の折曲りたるをいふ、萬代集雜六にも「若菜つむ腰はふたへにありおがら野べの小松をたのみてぞひく」とあり、○所せがりて　嫌ふ意也、○もていまして「もて」は持ちて「いましては」ゆきての敬語、つれゆきてといふ意也、○たうびよ　給ひてよといふに同じ、○さしてん　さやうに爲べしとなり、○いざ給へ　いざ我と共に來給へといふ意、源氏若紫の卷に「いざ給へよをかしき繪おど多く」とあり○たふとき業　佛事をいふ、

高き山の麓に住みければ、其山にはるゞと入りて、高き山の嶺のおり來べくもあらぬにおきて、にげて來ぬ、やゝといへど、いらへもせで、家に來ておもひをるに、いひはらたてけるをり、腹たちて、かくしつれど、年ごろ親のごと、やしなひつゝあひそひにければ、いとあなしくおぼえけり、

○入りて　深く入りてなり、○やゝといへど　嫗のやゝと男を呼べどなり、源氏夕顔の卷に「うひふじ給ひて、やゝとおどろかし給へど、ひえにひえ入りて」とあり、○いひはらたてけるをり　妻と詞爭などして腹たてける時なり、○腹たちてかくしつれど　一旦は妻の詞をまことと思ひ腹たちて、かく山に捨てた

れどとなり、

此山の峽より月もいとあぎりなくあくて出でたるをながめて夜一夜いもねられず、あなしくおぼえければ、あくよみたりける、

我心なぐさめかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て

とよみてなん、又いきて迎へもて來にける、それより後なん、をバすて山といひける、なぐさめがたしとは、これがよしになんありける、

○いもねられず　よく寝られずとなり、○さらしなや　信濃更科なり「や」は輕く添へたるなり、拾遺集別に貫之「月かげのあかず見るともさらしなの山の麓に長居すな君」とあり、○歌の意　更科郡姨捨山に照る月を見ても、我心を慰め難しとなり、此歌六帖にも出でたり、○又いきて　又山へゆきてなり、○これがよしになんありける　我心を慰めかねつるは、山へ捨てたる姨の事が氣にかゝりてなりけりとあり、

染殿の内侍

染殿の内侍といふ、いますありけり、それをよしありのおとゞと申しけるなん、時々すみ給うける、物をよくし給ひければ、御ぞどもをなん、あつけさせ給ひけるに、綾どもを多くつかはしたりければ、雲鳥の紋の綾をや染むべきと聞えたりしを、ともあくも、のたまはせねば、えなんつかうまつらぬさだめ、うけ給はらんと申し奉りければ、おとゞ御かへりことに、

雲鳥の綾の色をもおもほえず人をあひ見て年の經ぬれば

となんのたまへりける、

○染殿の内侍　西三條右大臣良相の女なり、系圖には良相の女二人、文德天皇の女御多賀機子、清和天皇の女御多美子とのみあり、○よしありのおとゞ　古今目錄に源能有、文德天皇第一源氏、母伴氏云々寛平八年七月十六日任右大臣と見ゆ、○御ぞ　御衣なり、○物をよくし給ひければ　裁縫の事をよくし給ひければなり、次にも「中將のもとより衣をなんしにおこせたりける」といへり、○

雲鳥の紋　雲鶴の紋なり、○染むべき　雲鳥の紋の綾絹をや染むべきといひやりたるにて、雲鳥の紋を染め出すにはあらず、○とをかくものたまはせねば、能有右大臣何とも返事し給はねばといふ意、○えなんつかうまつらぬ云々かく御返事なきは、我身に頼まずと思ひ定め給ひしならん、何故に我身に頼み給はぬか、其理由をうけたまはらむとなり「えなん」は決してといはんが如し、

○雲鳥の綾の色をも云々　おん身に久しく逢見で、わびしきまゝに綾の色をもおもはえずとあり、此歌續後拾戀四に二句「あやの色めも」結句「はどの經ぬれば」とあり、冠註に四の句、逢に藍を添へてよみ給へるあり、さあらでは、上の句ふようのいたづらごとになれり、こを假字たがへりとて、いみじきひがことのやうにいふは、古學者のかたくな心なり、このころは、かやうの事をり〳〵ありといへり、

おなじ内待に在中將すみける時、中將のもとによみてやりける、

秋萩を色どる風のふきぬれば人の心もうたがへれけり

とありければ、かへし、

秋の野を色どる風へふきぬとも心へかれじ草葉ならねば

となんいへりける、

○在中將　在原業平朝臣なり、○秋萩を色どる風の云々　秋の萩を色に染むる風の吹きたれば、人の心も他の色に染まむかと疑はれけりとなり「色どる」は染むる意あり、此歌後撰集秋上によみ人しらずとあり、古今戀四「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかゞとぞ思ふ」○心はかれじ　心は決しておん身を離れじといふ意に、枯を添へたり、此歌も後撰集秋上に出づ、

かくて住まずなりて後、中將のもとより衣をなんしにれてこせたりける、それにあらはひなどする人なくて、いとわびしくなんある、なほ必ずして給へとなんありければ、内待御心もてある事にこそあなれ、

大幣となりぬる人のかなしきへよるせともなくきかぞなくなる

となんいひやりたりける、中將

流るとも何とう見えむ手にとりてひきけん人ぞ幣と知るらむ

となんいひける、

○衣をなんしにおこせたりける　衣を縫はせに送りたりとなり、○あらはひは洗濯なり、○御心もてある事にこそあれ　かくあらはひおぞする人なきは、おん身のあだ〳〵しき心故なりけりとなり、○大幣となりぬる人の云々

[大幣]は祓する時人々の引くものなれば、人の心のこれかれと移り易きに譬へたり、古今集戀四に大幣の引手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ]とあり[大幣となりぬる人]は大幣の引手あまたとなりぬる人の意なり[よるせともなく]は、御祓してのち幣を川へ流すに、流れ〳〵て寄る瀬なき意なり[しかぞなくなる]は、さやうに泣くとなり、御心の定まらぬ故、いづれを終のよるべとする事もなくて、さやうにあらはひなぞする人もなしとて、かなしみ泣き給ふぞとなり、此内侍と中絶の後なればなり、さて文學全書に下句[よるせともなき鹿ぞなくなる]とあるは、いみじきひがことなり、○流るとも何とか見えむ云々　たとひ此處かしこと、さだめなく流るとも、知らぬ人には何物とか見えむ、おん身の如く手にとりて引きけん人こそ、幣とは知るらめ、かく昔のちなみあれば、こゝろ衣をも頼むなれとなり、いとたくみなるさまによめり、初句文學全書に[鳴かずとも]と誤れり、